

ハガイ書ノート

2024 版

Dr. Thomas L. Constable

紹介

タイトルと作者

この預言書のタイトルもおそらくその著者の名前です。^[1]ピーター・バーホーフ氏は別の可能性について言及しました:

「クールは…他の預言書の起源を比較し、ハガイもエレミヤと同様に、おそらく自分のメモを弟子の一人か二人に口述筆記したのではないかと結論づけている。この手順は、第三者、記録の簡潔さ、公式や啓示の独特な使用法を説明している。」^[2]

ハガイは自分自身を単に「預言者ハガイ」と呼んでいました(1:1;他)。^[3] 私たちはハガイの両親、祖先、部族の起源については何も知りません。彼の名前は明らかに「祭り」、またはおそらく「ヤハウエの祭り」を意味します。ハガイの預言の多くは千年にわたる祝福、つまりイエスキリストが地上で千年統治する間にもたらされる祝福について扱っているので、これは適切な名前であるといえるでしょう。彼の名前は、「ごちそう」を意味するヘブル語のHagから成り立っています。このことから、この本の学習者の中には、ハガイの誕生はイスラエルの祝祭の最中に起こったのではないかと推測する者もいます。^[4]エズラは、ハガイとゼカリヤの預言的奉仕を通じて、バビロン捕囚から約束の地に戻ったユダヤ人の流刑者たちがエルサレムの神殿の修復を再開し、完了したと述べました(エズラ5:1; 6:14; ゼカリヤ8:9参照 ; エズドラ第一 6:1; 7:3; エズドラ第二 1:40; シラ書 49:11)。

バビロニア人が神殿を破壊する前のかつての栄光についてのハガイの言及(2:2) は、彼がその神殿を見たことを暗示しているかもしれないし、またそうでないかもしれません。もしそうなら、この本に含まれるメッセージを伝えたとき、彼は老人になっていたでしょう。^[5] その場合、彼が預言したとき、彼は70歳を超えていたかもしれません。しかし、2章3節の言及が彼が以前の神殿を見たことを暗示しているかどうかはまったく確かではありません。

ギリシャ語七十人訳とラテン語ウルガタ訳の詩篇の一部の版では、一部の詩篇の著者をハガイおよび/またはゼカリヤであるとしています(詩篇111-112、125-126、137-138、および145-149)。しかし、どちらの預言者もこれらの詩篇を書いたという他の証拠はありません。この関係の理由は、これらの預言者たちが、これらの詩篇が歌われた神殿と密接な関係にあったためと思われる。

歴史的背景

ネブカドネザル王に率いられたバビロニア人は、紀元前586年にソロモンの神殿を含むエルサレムの都市を破壊し、ユダヤ人のほとんどを捕虜としてバビロンに連れて行きました。ここではイスラエル人は認可された祭壇や神殿を欠いていたため、モーセ律法で規定されているような正式な崇拜(宗教的崇拜)を実践することができませんでした。彼らは個人的にエルサレムに向かって祈り(ダニエル6:10参照)、おそらくは公にも祈り、律法の朗読を聞き、非公式に神を礼拝するために集まった会堂を設立しました。

ペルシャのキュロス王は、紀元前 538 年に亡命ユダヤ人が自分たちの土地に戻ることを許可しました。少なくとも3波の帰国者がこの機会を利用しました。その最初のもは、紀元前 537 年にシェシュバザルと彼に代わったゼルバベルの指導の下で帰還した約50,000人のユダヤ人のグループでした(エズラ記1:2-4)(別の説では、シェシュバザルはゼルバベルのカルデア名であったというものです。^[6])。エズラは紀元前 458 年に 1,700 人の男性と女性と子ども(おそらく約 5,000 人)の第 2 波を率いてエルサレムに戻り、ネヘミヤは紀元前 444 年に 42,000 人のイスラエル人の第 3 波を率いました。ハガイとゼカリヤは大祭司ヨシュアと同様、シェシュバザルに同行した帰還者の二人だったようですが、ハガイの名前はエズラ記冒頭の章の帰還者のリストには現れません。

「人口は13,350人から20,650人と推定され、流刑前の規模の3分の1に過ぎず、首都エルサレムは流刑前の規模の5分の1に縮小された。」^[7]

続く1年の間に、帰還者の最初のグループはエルサレムの青銅の祭壇を再建し、その上で犠牲をささげることが再開し、仮庵の祭りを祝い、(2番目の)神殿再建の基礎を築きました。「第二の神殿」とは、ソロモンが建てた最初の神殿とは対照的に、帰還者たちが建てた神殿を指します。)神殿の再建に対する反対により、建設は16年間延期されました。この長い期間の間に、ユダとエルサレムの住民の間に神殿再建に対する無関心が芽生えました。そして紀元前 520 年、ペルシア政府の変化とハガイの説教の結果、人々は神殿の再建を再開しました。^[8]

ハガイは紀元前 520 年に初めて建設再開の呼びかけを行い、ゼカリヤもすぐに追加の預言を与えてハガイに加わりました。ゼカリヤの宣教はハガイの宣教よりも長く続きました。帰還者たちは約 5 年後の紀元前 515 年にこのプロジェクトを完了しました(エズラ記 1-6 章を参照)。捕囚期間の 70 年を計算する 1 つの方法は、紀元前 605 年の最初のバビロンへの移送からです。紀元前 536 年に神殿の再建が始まった年まで もう 1 つの方法は、紀元前 586 年の神殿の破壊から紀元前 515 年の神殿修復完了までを数える方法です。

ハガイに関する年表データ^[9]

587/6	エルサレムと神殿の破壊、そしてユダヤ人の三度目のバビロン移送
585	ゲタリアの暗殺
561-60	追放されたエホヤキン王の釈放
559	キュロス大王 (559-30) がペルシアの王位に就く
539	キュロスはバビロンを征服する
538	キュロスの布告とシュシュバザールの下での最初の帰還
530	カンビュセス (530-22) はキュロスの後継者だが、19 年頃に突然亡くなる。522年7月1日
522	ガウマタ(バルディヤまたはスメルディス)の反乱と加盟問題(3月11日～10月5日)。ダレイオスが就任(10月5日)し、サトラップを組織する
522-21	ダレイオスは帝国を強化する。ゼルバベルがイエフド(ユダ)の総督に任命される
520	エルサレム神殿の再建作業が(再び?)始まる。神殿創立式(12月18日)
518	ダレイオス、エジプト法の成文化と権威を布告
515	神殿の再奉献(またはおそらく 516 年)

日付

ハガイは修復のコミュニティに4つのメッセージを届け、そのすべての日付をペルシャ王ダレイオス 1 世 (ヒスタस्पス) の 2 年目 (つまり、紀元前 520 年) に決めました。エゼキエルとダニエルはおそらくこの時までには亡くなっていたでしょう。この本に記録されているように、ハガイの宣教期間は、第 6 の月の 1 日 (1:1) から第 9 の月の 24 日 (2:20) までの 4 か月足らずでした。ハガイの宣教は紀元前520年より前に始まっていた可能性があります。そしてその後数年も続きました。[\[10\]](#) しかし、それは推測にすぎません。

現代の暦では、これらの日付は紀元前 520 年 8 月 29 日から 12 月 18 日の間となります。[\[11\]](#) これはハガイが帰還したイスラエル人に語りかけた最初の預言者であったことを意味しま

す。ゼカリヤはその年の8月に帰還者たちに預言を始めました(ゼカリヤ1:1)。預言者の中で最も正確に彼のメッセージを年代測定したのはハガイでした。

ハガイとゼカリヤを特徴づける預言の年代測定の正確さは、新バビロニア時代とペルシア時代を区別した歴史記述の年代記的スタイルを反映しています。^[12] おそらくこれらの預言者の中でより古い同時代人であるエゼキエルは、彼の預言の年代測定において 3 番目に正確でした。また、もう 1 人の同時代人であるダニエルも非常に正確でしたが、それほど詳細ではありませんでした。同様に、ハガイとゼカリヤの後に書いたエズラとネヘミヤも年代の正確さに同じ関心を示しました。

「膨大な数のバビロニア文書と天文データから計算された新月板からの証拠の助けを借りて、旧太陰暦とユリウス暦を正確な結果で同期させることが可能であることが証明された。」^[13]

- おそらくハガイは、帰還者たちが神殿を完成させた紀元前 520 年から 515 年の間にこの本を書いたと思われます。神殿の完成についての言及がないことは、それ自体がこの見解を強く主張するものではありませんが、合理的であると思われます。なぜなら、神殿の完成について言及することで本書をうまく締めくくることができるからです。

構成の場所

両方の章での神殿への言及から明らかなように、ハガイは明らかにエルサレムで説教し、著述したようです。この場所を確認するのは、彼の近くの山への言及です(1:8, 11)。ユダヤ人の亡命者たちが住んでいたバビロニアの地域には本物の山はありませんでした。

聴衆

ハガイは預言したときと同じくらい、聴衆についても具体的でした。最初の神託は、それぞれユダのユダヤ人の総督ゼルバベルと大祭司ヨシュアに対するものでした(1:1)。預言者は二番目のものをそれらの人々と残りの民に伝えました(2:1)。3番目の神託は祭司たちに対するものであり(2:11)、4番目の神託はゼルバベルに対するものでした(2:21)。明らかに、これらの神託にはより多くの聴衆、つまり修復コミュニティ全体、そして最終的には世界の一般の人々も含まれていました。

目的

「ハガイ書は、そこで語られる歴史的出来事の宗教的および神学的重要性を解釈することを目的とした預言的歴史である。」^[14]

ハガイの目的は単純明快でした。それはユダヤ人に神殿の建設を促すためでした。これを行うために、彼は第2の目的も果たしました。それは、人々に誤った優先順位を突きつけたことです。彼らは神の家を無視しながら、彼ら自身の家を建てていました。神殿の建設を完了することは重要でした。なぜなら、それができて初めて、人々は主(ヤハウェ)が指定されたとおりにレビの崇拝を完全に再開できるからです。彼らは契約上の不貞の罪で捕虜となったのです。したがって、彼らはモーセ契約への完全な従順に戻る必要がありました。さらに、古代近東では、国の神殿の栄光は人々の神の栄光を反映していました。したがって、神殿を完成させることは、ヤハウェを讃えることを意味しました。

「…彼はまた、神が再び「天と地を揺るがす」(2:6、21)とき、神の祝福の計画が「まもなく」(ハガイ2:6)訪れるだろうと告げて、人々に希望を与えるためにも書いた。」[\[15\]](#)

「これほど直接的かつ熱心に同時代人に説教をした預言者はいない。またこれほど成功した預言者もない。」[\[16\]](#)

「彼の説教の結果は、大いなる勝利だった。というのは、国民全体に金銭的な犠牲を払わせ、公共の聖域のために自分の私的利益を後回しにするのは、簡単な仕事ではなかった。しかし、ハガイはそれを成し遂げた。彼は流刑後のユダヤ教の真の創始者となり、彼の業績はエズラとネヘミヤの業績に先駆けたものとなった。」[\[17\]](#)

神学的な強調

ハガイが強調する軸は、地上における神の住まい、つまり礼拝の中心地として、またヤハウェの偉大さの象徴としての神殿です。彼にとって神殿は宮殿よりも重要であり、司祭は王子よりも重要でした。紀元前586年のエルサレム崩壊後、イエス・キリストが現れるまで、ユダヤ人には王は存在しませんでした。

「この時代の神学的問題はシンプルに、神の働きと臨在はどこで見ることができるかということです。」[\[18\]](#)

もう一つの神学的強調は、裕福な生活と比較して神の栄光を讃えることが相対的に重要であるということでした。

「各国政府は、健全な国民総生産は適切な産業基盤、効率的な経営、スキルを持ち合わせた労働者、市場原理の適正な運用の結果であるという前提に基づいて活動している。言い換えれば、経済の健全性は効果的な経済システムに依存しているということだ。しかし、ハガイは、経済学は経済学者に任せてよいという見方に異議を唱えた。ここでも、私たちは神の世界に住んでおり、神に中心的な地位と栄誉が与えられない限り、神が定めた法は私たちの祝福のためではなく、私たちを苦しめるために機能することになる。このように、ハガイは、世界の資源が世界の必要を満たさなければならないという私たちの懸念と、必要が満たされるだけでなく私たちの人生

が満足したものになるという私たちの切望について語っている。彼は他のどの預言者よりも明確にインフレの問題に取り組んでいる。彼の本は今日の私たちの時代のための冊子である。」[19]

その他の重要なテーマは、礼拝の前提条件としての聖さ、神の啓示としての預言の言葉、神の主権、人間の責任、そしてダビデ王朝の将来です。[20]

「ハガイとゼカリヤの神は明らかに恵みと憐れみの神である。」[21]

「神は関係と臨在の神としても表現されている。」[22]

特性

ハガイは旧約聖書の中でオバデヤ書に次いで二番目に短い書です。作家の文体はシンプルで直接的です。この本は散文と詩が混ざったもので、導入部は散文、オラクル(神の宣告)は詩となっています。

「ハガイが預言者によく見られる一般的な詩形式ではなく、リズムカルな散文スタイルを採用したというワイズマンやドルフらの意見に我々は同意できるであろう。」[23]

「おそらく、ハガイの神託のスタイルを『詩的な散文』と形容するのが最善だろう(Ackroyd, J[ournal of] J[ewish] S[tudies] 2 [1952] 164-65)」。

この本には、ハガイが紀元前520年の1年間のうち4か月足らずの間に帰国したユダヤ人に説教した4つの短いメッセージが含まれています。ハガイは、自分がイスラエル人に宣べ伝えたメッセージが神からのものであることをはっきりと認識していました。彼は38節で彼らの神聖な権威を25回確認しました。ほとんどすべての預言者とは対照的に、ハガイは、説教した人々が彼の言うことを聞き、彼の勧告に従ったという点で成功しました。

「ハガイは…一流の勧告の預言者である。」[25]

「実のところ、ハガイほど多くの霊的常識をこのような短い羅針盤の中に詰め込むことに成功した預言者はほとんどいない。」[26]

「興味深いことに、ハガイのメッセージには、他の聖書の預言者にみられる特徴的な要素がまったくない。たとえば、彼は偶像崇拝に対する非難の言葉を書いていない。社会悪や法制度の濫用については何も言わないし、姦淫や混合主義に対して説教することもなかった。彼の唯一のテーマは神の神殿を再建することだった。」[27]

「他の預言書のほとんどは、預言的な説教と神託を集めたもので構成されている。一方、ハガイは、散文の物語の枠組みに設定された直接演説の神託で構成されてい

る(1:1、3、12、15; 2:1、10、20)。そのため、この本はハガイの発言と、それが聞き手に与えた影響についての報告書として扱われている…」[\[28\]](#)

「ハガイの預言とヤコブの手紙には多くの共通点がある。どちらも日々の勤労に重点を置いている[第一コリント15:58参照]。』[\[29\]](#)

この本とホセア書は、旧約聖書の中で靈感によって書かれた唯一の預言書で、外国に対する神託が一つも含まれていません。

統一性と正統性

批評家はハガイの統一性や正典性に真剣に異議を唱えていません。[\[30\]](#)正典におけるその位置は年代順であり、流刑後の預言書をリードし、流刑前と流刑後の預言書に続きます。

文章

この本の中には文章の問題がわずかに見られます(1:2、9; 2:2、5、7、9、14、16)。これらに加えて、七十人訳聖書はヘブル語本文にいくつかの追加を加えています(2:9、14)。

「全体として、ハガイの文書がよく保存されているという点で、私たちは多くの学者に同意する。』[\[31\]](#)

概要

- I. 神殿を建てる呼びかけ 1章
 - A. ハガイの初挑戦 1:1-6
 - B. ハガイの二度目の挑戦 1:7-11
 - C. イスラエル人の反応 1:12-15
- II. 神殿の将来の栄光の約束 2:1-9
- III. 人々に未来の祝福の約束 2:10-19
- IV. ゼルバベルに関する預言 2:20-23

ある作家は、この本の中に狂気的な構造を見出しました:[\[32\]](#)

- A 同日に発せられた一対の神託は、未完成の神殿の悪影響を強調し、その後主の御言葉を心に留めるよう二重に呼びかけを行った 1:1-11
- B 神殿の再建に力を与える主の臨在の約束 1:13-15a

B' 来るべき栄光を保証する主の臨在の約束 1:15b-2:9

A' 同じ日に発せられた一对の神託は、主の言葉を心に留めよという二重の呼びかけを含む、完成した神殿の良い結果を強調するものだった 2:10-23

メッセージ

ハガイは、旧約聖書の預言書の最後のグループの最初の書です。これらの本は、ゼカリヤ書やマラキ書とともに、イスラエル人の回復共同体の生活を明らかにしています。エズラ記の歴史書は、同じ時代、同じグループの人々を扱っています。イスラエル人の生き残りはバビロン捕囚の後、この地に戻ってきました。帰還者たちは捕囚以前の祖国の過去の栄光の話覚えていました。しかし、彼らはまた、異邦人が支配する土地に戻ったので、大きな恥を感じました。彼らは困難で意気消沈した時代に生きました。彼らの希望は非常に影が薄く、短期的には不確実でした。これはかつての預言者たちが約束した栄光の地への帰還ではありませんでした。

ハガイには主から一つの重荷がありました。彼の情熱は、帰還者たちが神殿を再建し、モーセの律法に従って再び生活できるようにするよう促すことでした。ゼカリヤはこの任務において彼を助けました。マラキは約90年後に生き、旧約聖書の中でヤハウェからその民に最後の警告を発しました。

ハガイが奉仕する約18年前の紀元前538年、シェシュバザルとゼルバベルの指導のもと、約5万人のユダヤ人が捕虜から帰還していました。1年後、彼らは神殿の再建を始めました。彼らは基礎の修復を終え、上部構造の建設に着手していたところ、後にサマリア人として知られるその土地の原住民の反対により作業を中止させられました。

約17年間、彼らは神殿の工事を何も行いませんでした。それから主はハガイを導き、神殿の再建を再開するよう人々に挑戦させました。彼は紀元前 520 年に 4 つの短いメッセージを送り、人々を再び働かせました。人々は彼の最初のメッセージを聞いた後仕事に向かいましたが、その後困難が生じて仕事をやめました。そこで預言者は二度目のメッセージを伝え、人々は仕事に戻りました。しばらくすると、別の困難が起こり、人々は再び働くのをやめました。その後、ハガイは同日に2つのメッセージを伝え、ユダヤ人たちはプロジェクトを再開し、完了するよう動かされました。

神がこの本を永遠に、そして全人類のために保存した理由は、その永久的な価値にあり、これには二重の意味があります。ハガイ書はまず、逆境の時期にしばしば伴う危険を啓示しています。第二に、このような時代における信仰者の義務と神の資源を明らかにします。言い換えれば、ハガイは、落胆するような状況にあり、希望がぼんやりと燃えているときに伴う危険を暴露しているのです。そしてそれは、私たち読者がそのような時代に神の民の義務が

何であるべきか、そして神がどのように私たちを助けてくださるかを理解するのに役立ちます。

ハガイの4つのメッセージはそれぞれ、これらの危険の1つを扱っています。4つの危険とは、優先順位の違い、間違っただ視点、非現実的な期待、不必要な恐怖です。

まず一つ目の危険は、優先順位が間違っているという問題でした。人々は神殿の再建を進めるのに今が適切な時期ではないと考えました(1:2)。彼らは、建設を再開すべきであるという神からの何らかの指示を待っていたようです。しかし、彼らは自分たちの家を建てるのに忙しく、神殿を再建するという神の以前の命令を忘れていました。彼らは自分たちで家を建てることに非常に意欲的でした。彼らは自分たちの必要性を認識し、それに対して何か行動を起こしました。

しかし、主を讃え、主が命じられたとおりに人々が主を崇拝できるようにし、彼らの土地で主の評判を高めることができる家を建てることになったとき、彼らは待ち臨んでいました。そして17年が経ちました。未完成の神殿建造物を完成させる時が来ましたが、人々は自分たちにとってより重要なことを優先し、それを保留しました。

2つ目の危険は、視点が間違っているという問題でした。労働者たちが再び再建を始めると、人々の中には、彼らが取り組んでいる建造物と、バビロニア人が破壊した以前の神殿を比較し始めた人もいました。彼らは、現在の神殿はソロモンの神殿に比べれば何でもないと言っていたのです(2:3)。旧神殿を見た高齢者の中には、二つの建物を見比べて涙を禁じえなかった人もいました。彼らの仕事はどれも大したものではないように思えたので、彼らは落胆し、再び働くのをやめました。

3つ目の危険は、非現実的な期待の問題でした。人々は、自分たちが神殿再建の事業に取り組んだのだから、神が彼らに大きな祝福を与えてくれるだろうと考えていました。彼らは自分たちの外面的な従順を神が祝福されるべきものとして見ていました(2:12)。ハガイは、神の祝福を得るために必要なのは、単に石を石に積むことではなく、神への心からの献身をすることであると彼らに思い出させました。

4つ目の危険は、不必要な恐怖の問題でした。人々は周囲の異邦人の国々の強さを見て、自分たちの小さな共同体は決して何の役にも立たないと結論付けました。ハガイは、神がいつか異邦人の国々を裁くであろうということを彼らに思い出させなければなりません。彼らは当面の将来を見据えて、イスラエルの最終的な回復と諸国民に対する昇栄に関する神の約束を信じる必要がありました(2:21-22)。

神はハガイを導き、人々に自分たちの義務と力関係を思い出させることで、これらの問題の一つ一つに対処させました。彼らには、それぞれの場合において異なることをする責任があり、その後、神は彼らが成功できるようにするための恵み(助け)、つまり霊的な力学を与えてくださいました。

優先順位を見誤ったという問題に関して、人々の義務は神殿の再建に戻ることでした(1:8)。彼らは、自分たちがやりたいことよりも、神がしなければならないと言われたことを優先する必要がありました。神が与えてくださる力強さは、神の臨在でした。神は彼らとともにいて彼らを助けられるお方です(1:13)。

間違った視点の問題に関しては、強くなって働くことが彼らの義務でした。神が自分たちに与えた働きと、神が先祖たちに与えた働きを比較すべきではありません。彼らはただ自分たちのために神の意志を遂行することに身を捧げるべきです。神が与えると約束された力強さは、やはり、神ご自身が彼らと共におられることでした(2:4)。神は彼らが自分に命じられたことを実行できるよう彼らを助けようとされました。

非現実的な期待の問題に関して、彼らの義務は祭司から学ぶことであり、祭司は律法(モーセの教え)からの主の御心を彼らに思い出させ、真の従順に応じて祝福がもたらされるということを教えてくれました。神殿を再建するだけでは十分ではありませんでした。それは神の民に対する神の意志の一部にすぎず、実際には最も重要な部分ではありませんでした。

神殿の再建よりも重要だったのは、忠実で従順な精神に対する彼らの霊的な必要性でした。彼らは、主に忠実に従い、生活の中で主を高めるよう心から努めたに違いありません。このような心からの従順に対して主が約束された力強さは、彼らの人生に祝福をもたらしました(2:19)。帰還者たちが心に向けて主に従ったその日から、主は彼らを祝福してくださいました。しかし、もし彼らの従順が外面的で表面的なものなら、彼らは多くの祝福を期待してはいけません。

第四に、不必要な恐怖の問題に関して言えば、国民の義務は忍耐することでした。すぐには状況が好転することはないかもしれませんが、最終的には神は約束どおり、ご自分の民を回復されるでしょう。神が彼らに約束された力強さは、最終的には彼らの運命を逆転させるための神ご自身の行いでした(2:22-23)。異邦人は永遠に彼らを支配しませんでした。彼らの現在の指導者であるゼルバベルは、神が将来彼らに備えてくれる、より偉大な指導者を予見するものにすぎませんでした。私たちは他の聖書から、イエス・キリストが統治するために地上に戻ってくるときに「異邦人の時代」が終わることを知っています。[\[33\]](#)

私たちは今、この本の生きたメッセージを指摘する立場にあります。それは、神の民が神の意志の実現に関する問題に直面するときはいつでも、神のみことばが明らかにしているとおりに自分の義務を果たし、そのときには神ご自身が成功に必要なものをすべて備えてくださるという確信を持って行うべきであるということです。

私たちは優先順位を間違えることがよくあります。すでに私たちに神が望んでおられることを教えてくださっているにもかかわらず、私たちは神の指示を待ちながら行動に起こさないことがあります。待っている間、私たちはエネルギーと体力を消耗するような自主的な問題に巻き込まれる可能性があります。私たちがすべきことは、御言葉を読み、神が私たちに何を望んでいるのかを学び、それから優先すべき物事を最優先にすることです。私たちは神の議

題を私たちの議題にする必要があるのです。私たちがそのようにするとき、主は私たちとともにおられ、ご自身の意志をうまく遂行するために必要なものをすべて備えてくださいます(マタイ6:33参照)。

「私たちの仕事は神のものを大切にすることであり、神の慈しみ深い仕事はすべてのことにおいて私たちを気遣うことである。」[\[34\]](#)

私たちもまた、ハガイの最初の聴衆と同様に、神が私たちに何をするように召されたのかについて、適切な視点を失うことがよくあります。私たちは、大宣教命令を果たすという事業の自分の役割を見て、これがどれほど取るに足らないものであるかを自分自身に対して次のように考えるかもしれません:「もし私が、神が働いておられるときに、つまりハドソン・テイラーか、あるいは他のよく使われた神の僕が生きていたときに生きていたら、もしかしたら本当に世界を変えることができたかもしれないのに。私が使徒の時代に生きていれば、さらに良かっただろうに。」多くのクリスチャンは、他のクリスチャンが過去に成し遂げた偉業を見て気が散り、自分たちのささやかな貢献は取るに足らないものであり、時間と労力を費やす価値がないと結論付けてしまいがちです。

もし私たちがそのような態度をとっているのであれば、昔の聖徒たちの成功を可能にした同じ神が、私たちとともにいて、私たちが召命を達成できるようにしてくださいと約束してくださっていることを、私たちは自分自身に思い出させなくてはなりません。確かに私たちは、キリストが世界でより高く評価された栄光の時代ではなく、背教(神とその言葉からの逸脱)の時代に生きているかもしれません。それにもかかわらず、神の御心における私たちの使命は、過去の他の信者たちの使命と同じくらい今でも重要です。私たちは他人が何をしたかではなく、神が私たちに与えられたことに焦点を当てる必要があります。私たちは忠実に神に仕えることに集中する必要があります。

亡命後のコミュニティがそうであったように、私たちも非現実的な期待に苦しんでいます。なぜ私たちの教会は急速に成長しないのでしょうか? 私たちの宣教活動において、さらなる成果が見られないのはなぜでしょうか? なぜ私たちは生活の中でもっと霊的な力を感じられないのでしょうか? 結局のところすべての祝福は、誰を、いつ、どのように祝福するかを選択する主権ある神のご意志によってもたらされます。私たちは、帰還した亡命者たちと同じように、個人の聖さの重要性を過小評価し、活動を強調する傾向があります。

おそらく、私たちの取り組みが表面的で浅いため、神はこれ以上祝福していないのかもしれませんが。単に神の働きをしているからといって神の祝福を期待するのであれば、私たちは自分自身と神の言葉をより深く見つめる必要があります。私たちが心から神に従うなら、神は祝福してくださいでしょう。私たちは墓のこちら側で祝福を見ることはできないかもしれませんが、神はご自分に誠実に従う人々を祝福すると約束してくださっているので、最終的には神の祝福を期待することができます。

最後に、教会時代の私たちも、時として不必要な恐怖と闘うことがあります。敵はとても強そうです。私たちはとても弱そうに見えたり、感じたりします。しかし、私たちの義務は、忍耐強く、いつか主が戻ってきて正義の天秤を天秤にかけるという約束を覚えて信じることです(第二ペテロ3:8-13参照)。神は地上に王国を確立します。今の私たちの義務は、ひたむきに働くことです。^[35]

説明

I. 神殿を建てる呼びかけ 1章

この本の最初の主要部分には、帰還者たちに神殿を未完成のまま放置した場合の結果について警告する 2 つの神託、行動するよう 2 つの勧告、そして主の助けの約束が含まれています。

A. ハガイの初挑戦 1:1-6

1:1 エゼキエル書、ヨナ書、ゼカリヤ書と同様、ハガイ書には正式なタイトルがありません。ヤハウエは、「預言者ハガイ」を通じてゼルバベル(「バビロンで生まれた」または「バビロンの種」、出生地をほのめかした「バビロンの種」とヨシュア(「ヤハウエは救う」)にメッセージを送りましたが、それはイスラエル人全員にも送られました(2、4節)。

ゼルバベルはペルシャのユダ州の政治総督(監督者)であり、ユダヤ人の帰還民を約束の地に導いた(エズラ記2:2ほか)。彼はシェルティエル(「わたしは神に尋ねました」、エズラ記3:2、8; 5:2; ネヘミヤ12:1;他)の息子であり、エホヤキン王(エコニア)の孫でした。ダビデ王の子孫(第一歴代誌 3:17-19、マタイ 1:12 参照)。

ゼルバベルには二人の父親がいたようです(第一歴代誌3:17-19)。養父であるペダヤは彼の叔父だったのかもしれませんが。^[36]ペダヤがシェルティエルの死後に、シェルティエルの妻と結婚したとすれば、これはレビラト婚でした(申命記25:5-10参照)。^[37]もう一つの可能性は、ペダヤの死後、シャルティエルがゼルバベルを養子にしたということです。^[38] 3番目の選択肢は、これらの男性の1人が実際にはゼルバベルのより遠い先祖、おそらく彼の祖父であったということです。^[39]

ヨシュアは回復共同体の大祭司であり、アロンの子孫でした。彼は紀元前586年にバビロン捕囚となったエホザダクの息子でした(第一歴代 6:15; エズラ 3:2,8;ネヘミヤ12:1,8 参照)。彼は明らかに、ネブカドネザルがリブラで処刑し

たエルサレムを滅ぼしたときの大祭司であったセラヤの孫であると思われます(第二列王25:18-21、エレミヤ52:24-27)。[\[40\]](#)

ダレイオス一世(ヒスタスパス、紀元前521-486年)がペルシャを王として統治した2年目の6月1日に、主はこの最初の記録されたメッセージをハガイに与えました。これは紀元前 520 年のエルル 1 年(8 月29日)のことでした。[\[41\]](#) イスラエル人がバビロンでの流刑から戻ったときも、引き続きバビロニア暦に従い、秋ではなく春に年を始めました(出エジプト23:16、34:22参照)。

新しい月はそれぞれ新月で始まり、イスラエル人は一般にこの機会を新月祭りで祝いました(民数記28:11-15、イザヤ1:14、ホセア2:11参照)。ですから、神が約束の地で与えられたこの最初の預言的啓示は、流刑からの帰還後、イスラエル人のほとんどがエルサレムにいたはずの日に与えられました。

「ハガイの書には、さまざまな形で啓示の公式が少なくとも27回登場する。」[\[42\]](#)

ハガイの名前の意味(「祝祭」、または「祝われた者」)は、主が彼を通してこの最初の預言を与えられた時期を考慮すると適切であると言えます。作家が三人称でハガイについて語ったという事実は、古代において作家が自分自身を三人称で語るのが一般的だったため、ハガイ自身が作家であることを排除するものではありません。[\[43\]](#)

旧約聖書の歴史書では、著者は通常、ユダまたはイスラエルの王に言及して出来事を日付付けしましたが、現在ユダヤ人の中に王がいませんでした。彼らは「異邦人の時代」には異邦人の支配者の支配下にありました(ルカ 21:24、ダニエル 2 章、ゼカリヤ 1:1 参照)。前に述べたように、「異邦人の時代」とは、イスラエルが異邦人の支配下にあった時代のことです。これらの時代は、ユダが紀元前586年にネブカドネザルに主権を失ったときに始まり、メシアが改宗したイスラエルに主権を回復されるメシアの再臨まで続きます。

1:2 ハガイは自分のメッセージが万軍のヤハウエ、つまり全能のヤハウエから来たものであると告知しました。このタイトルは、ハガイ書に14 回、ゼカリヤ書に 53 回、マラキ書に 24 回、ヘブル語聖書に 265 回登場します。ハガイの 38 節にはヤハウエ(主)という名前が 34 回出てきます。

「当時ペルシャ皇帝は、エルサレム・ユダの小属州を含む広大な帝国を統治していた。皇帝の言葉は、ユダヤ人社会にとっても法であった。しかし今、別の言葉が彼らに伝えられた。全能の主、彼はペルシア帝国を含む全宇宙において最高かつ最も絶対的な権力者である！」[\[44\]](#)

主はゼルバベルとヨシュアに、イスラエル人が神殿を再建する時期ではないと言っていると告げられました。彼らを「わたしの民」ではなく「この民」と呼ぶことで、主はご自身と民の間に距離を置かれました。神殿の建設は16年前に始まりましたが、主に非ユダヤ人および混血ユダヤ人であったイスラエル人の近隣住民の反対により中止されました(エズラ3:8-13;4:1-5、24)。ユダヤ人たちが建設再開を検討したとき、彼らのほとんどはまだ適切な時期ではないと言いました。主のために家を建てようとするダビデの大きな熱意と対比してください(第二サムエル7:2)。

「神は人間のために人間のために行うすべてのことを、人間の手を通して行われる。」[\[45\]](#)

建設延期の決定は、近隣諸国からの継続的な脅威に基づいている可能性があります。あるいは、それで神殿を完成させることは、70年間の捕囚というエレミヤの予言に反することになると彼らは感じたのかもしれませんが(エレミヤ25:11-12;29:10)。もう一つの可能性は、神ご自身がそれを終わらせてくださると彼らが考えていたということです(エゼキエル40-48)。[\[46\]](#) さらに、ペルシヤ王はまだその作業を行うよう命令していませんでした。[\[47\]](#)

「[主の]家を建てることを拒否するということは、せいぜい、主が彼らとともにおられるかどうかは問題ではないと言っているに等しい。最悪の場合でも、たとえ主が定められた神の住処の条件を満たすことを彼らが意図的に拒否したとしても、主が民と共に生きてくださるとする神の恩寵を前提としていたのである。」[\[48\]](#)

「彼らの世界では神殿が国民の政治、経済、司法、社会、宗教生活を管理する中心であるため、再建の必要性は急務であった。言い換えれば、I AM(わたしは～である)の神殿を再建することは、彼の民の命に対する彼の支配と、預言された世界の支配を象徴することになるだろう(ゼカリヤ1:14-17参照)。[\[49\]](#)

今日、多くのクリスチャンは、今がまさに適切な時期ではないと感じているため、神の御心を実行していません。

「私たちは、告白して主に従わなければならないときに、言い訳をすることがあまりにも多い。『伝道十字軍の時ではない』、『聖霊がリバイバルをもたらす時ではない』、『伝道を拡大する時ではない』と言う。私たちは神がご自分の民に定められた『時と季節』を完全に理解しているかのように振る舞っているが、それを理解しているわけではない(使徒1:6-7)。」[\[50\]](#)

「これをするか、あれをしないかが主の御心であると言うのは、多くの罪をカバーするキリスト教の常套句である。」[\[51\]](#)

「預言者の最初のメッセージは、霊的生活に常に存在する問題、つまり神が求めていることを先延ばしにする人間の普遍的な傾向[つまり先延ばし]に焦点を当てている。」[\[52\]](#)

1:3-4 そしてハガイは、この論争演説の中で、指導者たちだけでなく、主のために民に語りかけました(2節)。彼は修辭的に、彼らが自分の家を建てるのに、神の家を再建しないのは適切なのかと尋ねました。彼らは自分自身の慰めよりも神の栄光を優先すべきでした(第二サムエル7:2、ピリピ2:21参照)。彼らの優先順位は真逆でした。

「彼らの問題は物資の不足ではなく、善の不足だった。」[\[53\]](#)

パネル張りの家(4節)は非常に豪華な家を表すかもしれませんが、ヘブル語のサパン(「パネル張りの」)は単に屋根のある家を意味することもあります。壁を覆った木製の羽目板や漆喰、そしておそらく天井も見えているようです。

「富裕層やより著名な人々の家もそのようなものだった(エレミヤ22:14; 第一列王7:7参照)。」[\[54\]](#)

「この節の対比は(Ackroyd [Exile and Restoration] 1968:155とは対照的に)、未完成で使用不可能なヤハウエの家と、完全で機能的なイエブド人の家との対比であり、むしろ、装飾的で精巧な民の家と廃墟となった神殿との対比である。」[\[55\]](#)

キュロス王は神殿を再建するために広葉樹の木材を買う資金をユダヤ人に提供していました(エズラ3:7; 第一エズドラ4:48; 5:54)。おそらく修復ユダヤ人は神殿を再建するためではなく、自分たちの家を建てるためにこの優れた木材を使用したと思われます。

「多くのキリスト教徒は古代ヘブル人に似ており、教会の建物を建設する(あるいは神の働きに資金を提供する)経済性が何よりも重要であるとなぜか自分に思い込ませていると同時に、個人的な贅沢を手に入れるためには出費を惜しまない。」[\[56\]](#)

「今日の神の家はもはや物質的なものではなく、霊的なものだが、物質的なものはいまだ非常に現実的な象徴のままである。どの地域のどの場所にある神の教会も、物質的な集会の場所、その場所に無頓着であるとき、崇拜とその働き、それはその生命が衰退していることの一環であり証拠である。」[\[57\]](#)

1:5-6 主は民に、現在の状況に照らして自分たちが何をしているのかを評価するよう呼びかけました(7節、2:15、18[2回]参照)。[\[58\]](#)彼らは神の祝福をあまり実感していませんでした。彼らは多くの種を蒔きましたが、収穫できるのは控えめな作物だけでした(10-11節、2:15-17、19参照)。彼らが育てた食べ物や飲み物は、最低限の必要を満たすだけでした。彼らは衣服を作るための繊維が非常に少ないため、衣服は非常に薄く、暖かさを保つことができず、彼らの財布には穴が開いているようで、すべての請求書を支払う前に、入れていたお金が消えてしまったのです。

「……神殿を建てないことで防ごうと考えていたあの貧困は、神が神殿を建てなかったために彼らにもたらしたものである。」[\[59\]](#)

この箇所は、聖書の中で貨幣に関する最初の言及である可能性があります。これは、お金を運ぶために使用される財布に関する最初の言及です。小アジアのリディア人は紀元前 6 世紀に初めて貨幣を鋳造しました。ハガイが書いたときにパレスチナに貨幣があったという考古学的証拠があります。[\[60\]](#) これは不従順に対する神の懲らしめでした(レビ記26:18-20、申命記 28:41 参照)。民は主を第一にすべきでした。

「ハガイの神学は、契約神学の呪いと祝福に基づいていた(レビ記 26 章、申命記 28 章参照)。特に不作(申命記 28:38)、不十分な食糧(申命記 8:10)、不適切な衣服(申命記 10:18) 契約を守らなかった結果である。」[\[61\]](#)

「神の寛大な賜物を雑学やおもちゃに浪費している裕福な世代のクリスチャンは、主が再臨される時、答えるべきことがたくさんあるだろう。」[\[62\]](#)

先延ばしは時間を盗むだけでなく、祝福を盗むことにもなります。[\[63\]](#)

B. ハガイの二度目の挑戦 1:7-11

1:7-8 主は再び民に、自分たちが行っていることをよく考えるよう呼び掛けられました(5節参照)。彼らは利益相反を犯しました。イエスは彼らに、木が豊かに生えている山に行き、木を切り倒し(「木を持ってきて」、神殿の再建を続けるように勧めました(エズラ3:7参照)。完成した神殿は神を喜ばせ、栄光をもたらすでしょう。

「重要なことは、家の規模や豪華さではなく、その存在である。彼らは自分たちの中に内住する神を望んでいる。」[\[64\]](#)

「旧約聖書の時代、ユダの丘には木々が生い茂っていた。ネヘミヤ記8章15節から、オリーブ、ギンバイカ、ヤシが入手可能であったことが分かる。地震による被害を最小限に抑えるために、石の壁に木の層を設けるのが慣例だった(エズラ5:8参照)。この木材と、屋根を支えるために神殿の壁から壁まで伸びるのに十分な長さの重い木材は、おそらく輸入する必要がある(エズラ3:7)。」[\[65\]](#)

「神殿の廃墟とその近辺には、建築用の石材が豊富にあった。神殿の木材はすべて紀元前587年に焼かれたため、エルサレムを囲む近隣の丘の森林から大量の木材だけ入手すればよかった。」[\[66\]](#)

キャロル・マイヤーズとエリック・マイヤーズは、使用された木材の大部分はおそらくすずかけの木であったと信じていました。[\[67\]](#)

「神の働きが最初に行われなければならない。それは私たち自身の働きよりも優先されなければならない。」[\[68\]](#)

「神を喜ばせるために喜んで仕事をするなら、それはまた神の栄光をもたらす。」[\[69\]](#)

「率直に言って、日曜学校の教師が成功しないのは怠惰のせいだ。説教者が成功しないのは怠惰のせいだ。怠惰は、人々がクリスチャン生活で失敗する理由である。努力しなければならない。私は、聖霊が怠惰を祝福してくださるとは思わない。」[\[70\]](#)

「ある著名な宣教師が言ったように、救われた魂を持ちながら、失われた人生を送ることはあり得る。キリストの贖いのみ業を信じることによって永遠の救いが保証されるにもかかわらず、怠惰と怠慢によって、実りある奉仕の機会が生涯失われる可能性があるという意味である。」[\[71\]](#)

J. バーンソン・マッギーは、フランク・モーガン博士の言葉を引用し、この箇所における3つの訴えを指摘しました。すなわち、心への訴え(あなたがたは立派な家に住んでいるのに、主の家を建てる時ではないと思うのはどういうわけか)、心への訴え(自分の道を考えなさい)、そして意志への訴え(上って行って神殿を建て直しなさい)です。[\[72\]](#) ハガイの学生の中には、7節と8節がこの本の重要な節であると考えている人もいます。[\[73\]](#)

1:9 イスラエル人は主から多くの祝福を求めましたが、ほとんど得られませんでした。彼らが穀物を持ち帰ったとき、主はそれを吹き飛ばしました。どうやら彼らの穀物は非常に軽くて小さかったため、脱穀するときにその

多くがもみがらと一緒に吹き飛ばされたようです。理由は明白でした。彼らは神殿を無視し、自分の家を建てて自分たちを養うことにすべての時間とエネルギーを費やしていたのです。

ハガイには「羊の主を宣言する」というフレーズが6回出てきます(1:9; 2:4、8、9、23 [2回])。また、より短いフレーズ「主を宣言する」も6回出てきます(1:13) ; 2:4 [2回]、14、17、23)。『ハガイ』ほど短い本ではこれは異例です。明らかに、作家は人々へのメッセージの神聖な起源を強調したかったのです。^[74]

1:10-11 帰還した流刑者たちが耐えていた暑さと凶作は、彼らの利己的な行動によるものでした(レビ記26:19-20、申命記28:22-24参照)。人工灌漑以外に、夏の暑い時期に植物が享受できる唯一の水分は露でしたが、それすら利用できませんでした。主は干ばつを呼び掛けられ、干ばつは彼らの生活に必要なすべての産物と農業生産力のあらゆる側面に影響を与えました(申命記28:38参照)。

「このような文脈に人間とともに動物が含まれるのは、旧約聖書の特徴である。主の愛と義は、「人間[アダム]と獣[ベヘマ]」の両方の保存に表れる(詩篇36:7) [英語 6]。^[75]

『自分で十分に満たすことができるようになったら』神に捧げようと計画している人は、決して自分が十分になることはないだろう^[76]

C. イスラエル人の反応 1:12-15

1:12 ハガイの説教はゼルバベル、ヨシュア、そして捕囚から戻った残りの民全員を動かして主に従いました。これは神に対する畏れの表れでした。

「ハガイは民を残りの者と呼んだ(ここの聖書箇所と14節と2章2節)。それは彼らがバビロン捕囚の生き残りだったからだけではなく、神の民の残りの者が常にそうあるべき姿になりつつあったからでもある。主との契約関係の中で従順な人たちである(イザヤ10:21参照)。^[77]

この「残りの者」という用語はおそらく、バビロンから帰還した人々と約束の地に残った人々の両方からなるユダヤ全人口を指します(エレミヤ8:3、エゼキエル 5:10、9:8、11:13を参照)。^[78]

「これは改心の始まりだった。この一つのこと、彼らは、歴史の中でずっと、そして捕虜になる前の衰退の中で最も拒否してきたこと、つまり神の言葉に従うことを始めた。^[79]

「しかし、盛んな時、預言的な叱責を見逃してしまいがちだが、困難な時神の霊に鈍感になった霊的生活の生々しい神経をさらけ出すことがしばしばある。神の言葉が最大の成功を収めるのは、しばしば人間的な例外的な困難の只中なのである。」[\[80\]](#)

「神は私たちの喜びの中で私たちにささやき、私たちの良心の中で語りかけるが、私たちの苦しみの中で叫ぶ。耳の聞こえない世界を呼び起こす神のメガホンである。」[\[81\]](#)

1:13 民の従順な反応により、主は再び使者ハガイにメッセージを送ることになりました。彼は主が民と共におられると告げました(2:4参照)。神の神聖な能力の保証は、神殿を再建することによって彼らが従い続けたときの成功を保証しました。私たちが神のご意志を実行する際の成功を保証してくれるのは、何よりも神の臨在です(ヨシュア1:1-9、マタイ 28:19-20 参照)。私たちの愛ある従順は神に近づくことになりますが、私たちの不従順は神をその臨在から遠ざけてしまいます。

「ユダの人々に対する神の約束は、来られる方の名前は『神が私たちと共におられる』という意味のインマヌエルであるということだった(イザヤ7:14参照)。」[\[82\]](#)

1:14-15 主は二人の指導者と民に神殿の建設作業を再開するよう激励されました(第二歴代36:22-23、エズラ1:5参照)。作業はその月の 24日に再び始まりました。おそらく人々が決断を下し、木を伐採したり、木材を鋸で切って準備したりするなどの準備をするのに3週間かかったかもしれません(8節参照)。エルル月にはイチジク、ブドウ、ザクロの収穫もあったため、遅れた可能性があります。[\[83\]](#)

「ここでは神は人々を操る神の操り人形としてではなく、従順に後押しを与えることでそれに報いる主権のある王として描かれている。」[\[84\]](#)

「エホバはこの約束を、まずゼルバベル、ヨシュア、そして民に喜んでその業を遂行する意欲を与えることによって成就された。」[\[85\]](#)

II. 神殿の将来の栄光の約束 2:1-9

2:1 主は、ほぼ一か月後の同年の紀元前 520 年 7 の月の 21 日(ティシュリ、現代の 10 月 17 日)に、ハガイに別のメッセージ、つまり励ましの神託を明らかにされました。この日は仮庵の祭り(ブース)の最終日でした。ティシュリはイスラエル人にとってお祝いの月でした。今月1日にはラッパ

の吹奏を祝い、10日には贖罪の日を祝いました。仮庵の祭りは7日間続き、翌日は休息日でした(レビ23:33-44)。

「そのとき、この祝宴が終わると、神の力強い手と差し伸べられた御腕による最初の救出の栄光と、現在の少数と貧困に対する(人々の)悲しみが再びよみがえらざるを得なかった。この憂鬱は、次のことについての重い考えをもたらさざるを得なかった。彼らが神に従って従事していた仕事…」[\[86\]](#)

この日付が重要であるもう1つの理由があります。400年以上前、ソロモンはこの祭りの期間中に神殿を奉献していました(第一列王8:2)。人々は自分たちの現在の神殿とソロモンの神殿を比べて落胆しました(3節)。

2:2 聴衆は最初のメッセージを受け取ったのと同じく、ゼルバベル、ヨシュア、そしてユダヤ全土でした。

2:3 主は、66年前に滅びたソロモンの神殿を見た修復共同体の年長者たちに、現在の神殿はそれに比べれば大したものではないと思わぬかと尋ねられました(ゼカリヤ4:10参照)。主の三つの質問により、人々は現在の神殿が以前の神殿ほど壮大ではないことを認めざるを得ませんでした。

「昔の時代の業績や功績を過剰に叫んで[つまり美化]して、現代の奉仕を妨げてしまうのは、老人のせいであることもある。」[\[87\]](#)

16年前の紀元前536年に神殿の基礎が築かれたときも、年長の帰還者たちは同様の否定的な比較をしていました(エズラ3:8-13参照)。ソロモンの神殿の奉献式は、ちょうど440年前の仮庵の祭りで行われました(第一列王8:2; 第二歴代7:8-10)。ですから、おそらくそれがこの日に主がハガイにこのメッセージを与えた理由なのかもしれません。

「敬虔で真面目なユダヤ人にとって、第二神殿は『最初の栄光に満ちた家』に比べれば、『無に等しい』ものに見えたに違いない。確かに、ヘロデによって修復された第二神殿は、建築的な素晴らしさにおいて第一神殿をはるかに凌駕していた。」[\[88\]](#)

しかし、ソロモン神殿のかつての栄光は、おそらくその外観の壮大さだけではありませんでした。その神殿は、イスラエルの政治的独立と国民的アイデンティティ、そしてイスラエルの神の主権を象徴していましたが、それらはすべて今では失われているか、謙虚にされています。さらに、現在の高齢のイスラエル人が破壊される前のソロモンの神殿(外観のみ)を見たとき、神殿はその外観の栄光のほとんどを剥ぎ取られていました。[\[89\]](#)

「ゼルバベルの神殿は、ヘロデが改築した際に基礎まで平らにされたが、彼の神殿は依然として第二神殿とみなされていた。」[\[90\]](#)

「タルムードはこの点に明確に注意を呼び掛けており、もう一つの卓越した点として、最初の神殿は建立410年だったのに対し、二番目の神殿は420年続いたと述べている。」[\[91\]](#)

2:4 主は再びゼルバベル、ヨシュア、民に働くよう励まし、彼らと共におられることを再び約束されました(1:13参照)。ダビデは最初の神殿に関してソロモンに同じ責任と約束を与えました(第一歴代 28:10、20)。神の働きを行う際、比較は落胆する要因となりうるため、それに携わる人々は、神が自分たちと共におられることを思い出す必要があります(マタイ28:20、マルコ 6:50参照)。

「落胆に立ち向かう鍵はここにある。自分自身の声に耳を傾けるのをやめ、彼と彼の約束の言葉に耳を傾け始めよ。」[\[92\]](#)

「仕事がどれだけ大きくても、どれだけ小さくても、違いはない。『強くあれ』ということ覚えておく必要がある。」[\[93\]](#)

2:5 主はイスラエル人が出エジプトの際にエジプトを出たときに彼らにした約束を繰り返しました。神の御霊が彼らの中に留まるので、彼らは恐れる必要はありませんでした(出エジプト19:4-6、33:14、イザヤ63:11-14参照)。帰還者たちは、バビロンでの別の捕囚から出発したばかりだったため、エジプトから出発した先祖たちに共感することができました。主は雲の柱の中で彼らとともにおられたように、今も人々とともにおられます。ダビデがソロモンに、神が共にいてくださるという約束をして最初の神殿を建てるよう勧めたように(第一歴代28:20)、ハガイもゼルバベルとヨシュアに同じ約束で第二の神殿を建てるよう勧めました。

「神学的に素朴で、特に神殿と箱が完全でないと神が共におられないのだろうかと思った人もいたであろう。帰還者の多くは疑いなく恐怖に駆られた——それらは神がエルサレムに永遠の『イカボド』を書き記したのではないかという恐怖、どんなに祈っても敬虔になっても彼らを再び祝福することはできないのではないかという恐怖、すべての努力が無駄になるのではないかという恐怖、政敵が実際に勝利するのではないかという恐怖、すべてが失われるのではないかという恐怖などであった。」[\[94\]](#)

2:6 ユダヤ人たちの自信と恐怖のなさの根拠は全能のヤハウエからの約束でした。イエスは将来、出エジプトとシナイ山で行ったことが再び行

われるでしょう(出エジプト19:16、18; 詩篇68:8; 77:16-18)。海と陸を含む天と地を揺るがすことは、文字通りの巨大な地震を表しており、これは主の超自然的な介入の証拠でした(イザヤ書 2:12-21; 13:13; エゼキエル書 38:20 ; アモス 8:8 参照)。[\[95\]](#) これは、キリストが地上に再臨されるときに起こります(ヨエル 3:16、マタイ 24:29-30)。しかし、紀元前 520 年はペルシア帝国も大きな混乱を経験した年でした。[\[96\]](#)

ヘブル人への手紙の著者は、ヘブル人への手紙12:26でこの聖句を引用しました。そして、キリストのうちにある私たちには、来るべき宇宙地震に耐える揺るぎない王国があると付け加えました(ヘブル人への手紙12:28-29)。ハガイの予言は今も成就を待ち臨んでいます。

「新約聖書の著者は、ハガイの言葉の中に、古い経済の一時的な性質と、イエスの使命によって始まった新しい経済の不変の永続性との間の暗黙の対比を見ている。」[\[97\]](#)

2:7 同時に、全能のヤハウェはすべての国々を揺り動かすでしょう。彼の帰還は世界の政治的および政府構造を混乱させるでしょう(ダニエル書 2:35、44; ゼカリヤ書 14:1-4; マタイ 21:44 参照)。エジプト人が出エジプトの際に出国するヘブライ人に宝物をもたらしたように、異邦人の国々はイスラエル人に富をもたらすでしょう(出エジプト記3:21-22、11:2-3、12:35-36 参照)。

英語訳では「すべての国民の願いがもたらされる」となっているものもあります。この「欲望」は、諸国民が望む富への非個人的な言及である可能性があります(イザヤ60:5、ゼカリヤ14:14参照)。[\[98\]](#)

「ゼルバベルの神殿に装飾品がないことは、千年神殿が建設される日にもたらされるであろう豊かな宝物によって十分に補われるだろうと考えられているようだ。」[\[99\]](#)

あるいは、この「欲望」は個人的なものである可能性があります。この場合、それは救世主の預言である可能性があり、そのため一部の翻訳では「欲望」を大文字にしています。[\[100\]](#) チャールズ・ウェスリーは、この2番目の解釈に従って、クリスマスの賛美歌「天には栄え(Hark! The Herald Angels Sing)」を書きました。「来たれ、諸国民の願いよ、来たれ! あなたのへりくだった住まいを私たちに据えてください。」ヘブル語のテキストでは問題は解決されず、解釈的なものになります。おそらく主は意図的に曖昧で、国々の富とメシアの両方のことを念頭に置かれていたのでしょう。[\[101\]](#)

「覚えておくとよいのは……キリスト教の通訳者の大多数は初期の頃から、ユダヤ教の伝統に従ってイスラエルの救世主の到来に関する聖句に言及していたことである。」[\[102\]](#)

主はまた、神殿(「この家」)を栄光で満たすと約束されました。文脈を考慮すると、ここにある神殿は 2 番目の (修復された) 神殿ではなく、千年神殿であるに違いありません。この栄光は諸国民がもたらす富となるかもしれません (イザヤ60:7、13参照)。あるいは神殿自体の素晴らしさかもしれません。[\[103\]](#)あるいは、目に見える栄光は神ご自身の臨在の栄光かもしれません (出エジプト40:34-35、第一列王 8:10-11、エゼキエル43:1-12参照)。シメオンは幼子イエスを「あなたの民イスラエルの栄光」と呼びました (ルカ2:32)。しかし、ヘロデの神殿におけるイエスの臨在は、千年神殿に現われる神の栄光を予感させるものにすぎませんでした。

「すべての王国を揺るがすことによって、神[ヤハウェ]は諸国民に、神の家の栄光のための贈り物として自分たちの宝物を神に差し出すよう仕向けることができる。」[\[104\]](#)

2:8 この聖句は、7節に非個人的な富が含まれているという見方を裏付けているように見えます。主は、世界中のすべての銀と金をご自分が所有し、支配しておられることを人々に思い出させ、それによって将来に諸国の人々にそれを神殿に持って来させることができるのです。

「重要なのは、そのようなものはすべて神のものであり、したがって神にとって価値はないので、神自身の栄光が中心であるということかもしれない。」[\[105\]](#)

この思い出は、神殿を再建するハガイの同時代人たちも勇気づけられたに違いありません。神は彼らにもっと多くの財源をもたらしてくれるでしょう。そうすれば、彼らはいつか今のささやかな神殿を輝かせることができるでしょう。

2:9 現在の神殿はソロモンの神殿ほど栄光に劣っていたものの、主は神殿の後の栄光が以前の栄光よりも大きくなると約束されました。主はまた、神殿の場所、すなわちエルサレムに平和をもたらすと約束されました (イザヤ60:18、ヨエル3:17、ミカ5:4参照)。[\[106\]](#) これらのことはどちらもまだ起こっていないので、実現するのは将来(ミレニアル世代)でなければなりません。[\[107\]](#) 永続する平和は、メシアが再び統治し統治するときのみ実現します (イザヤ2:4、9:6、ゼカリヤ9:9-10 参照)。ヘロデ大王がイエス・キリストの臨在のもとに改修した第二神殿のイエス・キリストの装飾は、この預言の崇高な約束を成就しているとは思えません。[\[108\]](#)

主は仮庵の祭りの機会を利用して、ハガイの時代に神殿の建設者たちを励ましました。この祭りは出エジプト記を振り返り、イスラエル人に荒野の放浪を思い出させ、約束の地への定住を予期させました。このメッセージはまた、出エジプト記を振り返り、現在の神殿建設に言及し、将来の神殿の栄光を予想していました。

III. 人々の将来の祝福の約束 2:10-19

2:10 紀元前 520 年 9 月 24 日に主から別の預言が与えられました。(キスレブ24日、12月18日)。5年後のこの日、神殿が再奉献されたので、この日付は特に重要です。ユダヤ人はこの出来事をハヌカの祝日(奉献)で祝ってきました。そしてこの日は今日も人々によって祝われています。この預言と前の預言の間の 2 か月間 (1-9 節)、ゼカリヤはエルサレムで宣教を始めました(ゼカリヤ 1:1)。

2:11 全能のヤハウエはハガイに祭司たちに裁定を求めるよう指示しました。祭司たちはモーセ律法の公式通訳者であり、以下の内容は儀式上の穢れの問題を扱っています。これは教訓的な説教であり、宗教的不純さについての重要な教訓を教えることを目的としています。

2:12 ここで問われた問題は、誰かが聖別された食べ物を衣服の中に入れて持ち歩き、その衣服で他の種類の食べ物に触れた場合、その食べ物は神聖なものになるか、ということでした。聖肉は、特定の犠牲の目的のために聖別された肉でした(レビ6:25、民数6:20参照)。祭司たちの答えは、「いいえ、それは神聖なものにはなりません」でした。衣の中に運ばれている肉は衣を神聖なものにしますが、聖性は衣を超えて他のものに伝わることはありません(出エジプト29:37、レビ6:27、エゼキエル44:19、マタイ23:19参照)。

人々は明らかに、自分たちは神の聖なる選ばれた民として聖なる神殿で働いているのだから、自分たちが接触すること、行うことはすべて神聖なものになると考えていたようです。もう一つの見方は、主はご自分の民が異教の支配者から贈り物を受け取り、それを神殿の建設に使用するのを阻止しようとしたというものです(エズラ6:8-10参照)。[\[109\]](#)

2:13 2番目の質問は、たとえば死体に触れるなどして汚れた人が、何らかの食べ物に触れた場合、その食べ物は汚れるのかというものでした。答えは、「汚れる。」でした。モーセの律法は、道徳的な汚れは伝染する可能性があるが、道徳的な清さは伝染できないと教えていました(レビ6:18、22:4-6、民数19:11-16参照)。

ちなみに、同じ原則が今日の身体的健康の分野にも当てはまります。病人は自分の病気を健康な人に移して病気にすることはできますが、健康な人が自分の健康を病人に移して病気を治すことはできません。同様に、汚れた水はきれいな水を汚染しますが、きれいな水は汚れた水を浄化することができません。

「友よ、聖水で泳ぐことはできるが、それで神聖になれるわけではない。」[\[110\]](#)

「儀式やその類の事を通して自分自身を神に受け入れさせようとするのは、庭をきれいにして香り高くしようとして、裏庭に積まれた肥料の山にシャネル5番を1ガロン注ぐようなものである。友よ、それは機能しない。」[\[111\]](#)

「国民の長きにわたる不従順により、彼らの働きは神の前に無益なものとなった。」[\[112\]](#)

2:14 その後、ハガイはこの原則を人々に適用しました。彼らの犠牲や捧げ物は汚れていたため、神には受け入れられませんでした。自分たちが完成させようとして取り組んでいた神殿のような神聖なものに触れたことで、自分たちが神に受け入れられるようになったなどと考えてはなりません。彼らは以前は汚れていたため、彼らの現在の犠牲は神には受け入れられませんでした。

「何が起こったのかというと、人々は神殿での自分たちの働きと、主のみから与えられる聖化とを混同していたのだ。」[\[113\]](#)

「ハガイは、神殿の工事が人々の運命に関係する可能性があるというメッセージを伝える手段として、複雑な司祭の裁定を利用している。」[\[114\]](#)

2:15-16 人々は再び何かについて注意深く検討する必要がありました(1:5, 7参照)。彼らは、神殿を再建することによって主に従い始める前(1:12)、モーセの契約に不従順であったことを思い出す必要がありました(1:5-11参照)。彼らは契約に対する不誠実であったために主の懲罰により、収穫量が大幅に減少しました。彼らの穀物は50パーセント、ブドウは60パーセント減少しました。

2:17 主は立ち枯れ、黒穂病、雹を用いて民とその植えたものを打ちましたが、彼らはまだ悔い改めませんでした(アモス4:9参照)。乾燥した熱のために熱風が作物に問題を引き起こし、過剰な湿気のためにカビが別の問題を引き起こしました。おそらく、これらの状況はメリズム、つまりあらゆる種

類の気象関連の問題を意味する正反対のことを表現する比喻であると考えられます。[\[115\]](#)エジプトの疫病の一つである雹(出エジプト9:13-35)は、保護されていない作物に深刻な被害をもたらしました。

2:18-19 この預言が耳に届いた日、すなわち九月二十四日、人々はあることに気づきます。彼らは、神殿の再建を始めたその日から、自分たちの苦難が続いていることに気づくはずでした(1:14-15参照)。彼らは依然として種子、ブドウ、オリーブなどの主食、イチジクやザクロなどの贅沢品の不足に苦しんでいました。しかし、主は、まさにその日、つまり第9の月の24日から彼らを祝福することを明らかにされました。

この神託は、人々が神殿の再建を再開した直後に農業における祝福が始まらなかった理由を説明しています。彼らの現在の献身と従順は、以前の契約の不貞とその罰を一掃するものではありませんでした。その罰は自然に治まらなければなりませんでしたが、この預言の日の時点で、神はより良い収穫で人々を祝福し始めるでしょう。このメッセージは確かにユダヤ人たちに、粘り強く従順を貫くよう勇気づけたに違いありません。

「エゼキエルがバビロニアに捕囚された9年目の第10の月の第10日(エゼキエル24:1-2で言及)は、第二列王記25:1でも、エルサレム包囲が始まった日として明確に記されている。これは、歴史書の中で、ある出来事がまさにその日に日付が付けられた最初の出来事である。エレミヤ52:4にも、同じ正確な日付が記されている。バビロニア軍がユダヤの首都を包囲しようとしていたまさにその時、数百マイル離れたバビロニアにいた預言者エゼキエルに、その事実が神から啓示されたのです。エゼキエルはこの時、第二列王記24:11-16に記されているネブカドネザルのユダヤ人捕囚追放以来、すでに亡命していた。エゼキエルは、エルサレム陥落を記念するこの日を、観察と保存のためにはっきりと書き記すように言われた。この日、紀元前590年のテベト月10日が、「荒廢」の70年の期間の始まりであった。把握すべき重大な事実、この日からハガイが強調した日、すなわち紀元前520年のチスレウの月24日まで、25,200日、すなわち360日ずつのちょうど70年の期間があったということである。」[\[116\]](#)

神はご自分の民の従順を祝福されますが、場合によっては、過去の罪によって必要となった罰を消し去らないこともあります。罪は常に死をもたらします(ローマ6:23)。場合によっては、祝福が始まる前に、その罰が去らなければならないこともあります。

IV. ゼルバベルに関する預言 2:20-23

「彼の本の最後の節は、ハガイが印象派の画家で文学的に相当する人物であることを明らかにしている。彼は精緻な詳細を省いて全体的なトーンと効果を与えている。」[\[117\]](#)

2:20 主は、前のメッセージ(10節)と同じ日に、第9の月の24日(キスレブ24日、12月18日)に、ハガイに二度目のメッセージを与えられました。これは救いの神託でした。[\[118\]](#)その目的は、民のために新しい指導者を立てるといふ主の意図を告げ知らせることでした。

2:21 ハガイはゼルバベルに、ヤハウェが天と地を揺るがそうとしていると告げるようになっていました。ここでも神の裁きが視野にあります(6節参照)。ヨシユアや民衆ではなくゼルバベルが受信者であったということは、ゼルバベルが王家の血を引いていたことから、そのメッセージが王家の予言を扱っていたことを示唆しています。

2:22 主は地上の諸国民の王座を打ち倒し、異邦人の王国の勢力を滅ぼすと発表されました(出エジプト15:5、ダニエル2:34-35、44-45参照)。彼は彼らを互いに敵対させることによって彼らの軍隊を打倒するでしょう(ゼカリヤ12:2-9;14:1-5;黙示録16:16-18; 19:11-21参照)。

2:23 そうすると、主はゼルバベルを自分の僕にすることを約束されました。「わたしのしもべ」というタイトルは、旧約聖書ではしばしばメシア的なものです(第二サムエル3:18、第一列王11:34、イザヤ42:1-9、49:1-13、50:4-11、52:13-53:12; エゼキエル 34:23-24; 37:24-25参照)。ハガイと同時代のゼカリヤは、ゼルバベルを指す別の救世主の称号「枝」を使用しました(ゼカリヤ 3:8; 6:12; イザヤ 11:1; エレミヤ 23:5-6; 33:14-16 参照)。主は特別な目的のためにゼルバベルを選ばれたので、ゼルバベルは印章の指輪のように造られたのでしょう。印章指輪は、王が王の権威と個人の所有権を示すために使用したものでした(第一列王21:8、ダニエル6:17、エステル 8:8 参照)。

「印章指輪は非常に貴重なものだったので、不正な人物による盗難や悪用を防ぐために、通常は首にかける鎖に付けたり、右手に指輪として着用したりしていた。」[\[119\]](#)

「したがって、『印章』は、神の御心を遂行するよう割り当てられ、印章となる指定された『しもべ』を通して、ヤハウェの宇宙的かつ最高の支配が地球上に影響を与えるという概念の素晴らしい比喻である。」[\[120\]](#)

神はゼルバベルを選んで、来るべきメシアに王の権威と個人の所有権を指定しました。神は以前、ゼルバベルの祖父エホヤキンが神の印章指輪であるなら、それを外してネブカドネザルに与えるだろうと明らかにしておられました(エレミヤ22:24-25)。したがって、印章指輪のこの図がゼルバベルを、神がダビデ王家の血統を回復し、21節と22節で約束されている勝利をもたらすダビデとエホヤキンの子孫であるとみなしていることは明らかです。神はそれをゼ

ルバベル個人を通してではなく、彼の子孫の一人、すなわちイエス・キリストを通してでした(マタイ1:21参照)。[\[121\]](#)

「印章の指輪のこの鮮やかな姿は、神が再び権威を与えダビデとその王朝に約束したゼルバベルに代表されるダビデ家系の新たな選出を証明した。」[\[122\]](#)

エホヤキンにかけられた、彼の子孫の誰もダビデの王座に就かず、ユダを統治しなくなるという呪い(エレミヤ22:30)は、明らかに彼の直系の子孫(つまり、彼の息子たち)に言及していました。しかし、イエス・キリストはソロモンの子孫ではなく、ダビデの息子の一人であるナタンの肉体的な子孫であったため、ダビデの王としての資格がありました。イエスはヨセフの嫡子であり、ソロモンとエホヤキンの肉体的な子孫でした(マタイ 1:12-16、ルカ 3:23-31 参照)。ダビデの王として仕えるイエスの権利には 2 つありました。イエスはナタンを通してダビデの肉体的な子孫であり、もう 1 つはソロモンを通してダビデの王の子孫でした。

「神はゼルバベルに対し、不敬虔の罪でエコニヤに与えられた判決を取り消された[エレミヤ22:24]。」[\[123\]](#)

ゼルバベルはここでメシアを代表または典型化しています(ゼカリヤ6:9-15におけるヨシュアの同様の役割を参照)。彼の名前は約束されたメシアのコードネーム(アトバシュ)となります。[\[124\]](#)この約束の確かさは、「主」が「万軍の主」と二度、「主」と三度繰り返されていることから明らかです。

「…過去の重要な出来事(ダビデの権力の誕生、ソドム、出エジプト、ギデオン)は来るべき日の象徴となった。そして、同じことが重要な人々にも当てはまる。ダビデは、主がこれからなされることに非常に共感するようになり、歴代の王は彼と比べられましたが、メシアはダビデとさえ呼ばれた(エゼキエル 34:23)。」[\[125\]](#)

メシアをダビデとして語っている他の箇所には、エレミヤ 30:9 やホセア3:5 などがありません。

「神はゼルバベルをご自分の『僕』、『選ばれた者』と呼ぶことによって、ダビデが享受していたものと同じ地位を彼に与えた(第二サムエル3:18、6:21、7:5、8、26、第一列王8:16参照)。「印章の指輪」との比較は権威のある立場を示しており、ゼルバベルの祖父エホヤキンに宣告された判決を覆す(エレミヤ22:24-30参照)。」[\[126\]](#)

「ハガイ 2:21-23 の言葉は、ゼルバベルに直接語られたにもかかわらず、彼の時代には成就しなかった。ハガイの預言のこの明らかな失敗をどのように説明できようか？ダビデの子孫でユダの総督であるゼルバベルは、役人だった。ハガイは、当時の捕囚後の共同体におけるダビデ王朝の代表者であった。将来のダビデの王位の高揚に関する預言が彼の人物に付け加えられた。神がその民のために偉大な計画を持っていたことを同時代人に保証するために、神殿と同様に(ハガイ2:6-9参照)、終末論的現実を具体的な歴史的存在と関連づけた。ゼルバベルは、いわば、ダビデの家にとって輝かしい未来の目に見える保証だったのである。ハガイの時代には、実際に救世主的な希望を抱く人もいたかもしれない。しかし、啓示と歴史の進歩の中で、イエス・キリストがハガイの預言を成就した。」[\[127\]](#)

「おそらくこの預言は額面通りに受け取られるべきだが、暗黙の偶発性の要素が付加されている。主はゼルバベルの時代にダビデの王座の栄光を回復することを望んでいたかもしれないが、捕囚後の共同体内でのその後の展開が彼を延期させたただけだったのかもしれない。その出来事により、ゼルバベルは来るべき偉大な王の原型に追いやられた。」[\[128\]](#)

「これらの宣言はゼルバベルにおいて実際に成就したのだろうか？彼は、ハガイの言うような異邦人打倒を伴うイスラエル王政復古の先駆けとなったのだろうか？この時代の歴史には、彼がそうしたという証拠はない。ハガイの約束は、ゼルバベルという人物において実現しなかった。それどころか、この預言が与えられてから間もなく、ゼルバベルは無名になり、表舞台から去ってしまった。彼がどうなったのか、どのような状況で生涯を終えたのか、歴史は沈黙のままである。」[\[129\]](#)

「ハガイ自身、必然的に自分の言葉の実現が遅れると予想していた可能性は低い。予測と実現の間に存在する可能性のある時間的な距離を彼には予測する方法がなかった。」[\[130\]](#)

この最後の神託は、ハガイの時代にイスラエルに対して主権を行使していた異邦人の国々を将来打倒することを約束しています。エホヤキン王の子孫、そしてその前のダビデがその日の神の代理人となる。彼はゼルバベルの子孫であり、神の民の政治的支配者となるという点でゼルバベルと似ています。神はエホヤキンから印章の指輪(神の選択と権威の叙任の象徴)を撤回しましたが(エレミヤ22:24)、それをゼルバベルの将来の子孫に返そうとされました。

この王の印章の指輪(つまりダビデの王座)の修復は、主権者ヤハウエの純粋な恵みと忠実さによる行為でした。なぜなら、イスラエル人はそのような未来に値するものではなく、彼ら自身でそれをもたらすこともできなかつたからです。神の計画には彼らの国に輝かしい未来がまだ残されていたため、そのようなメッセージは帰還した流刑者たちを励まし、神殿を完成させる動機となったことでしょう。

「ハガイの説教は、告発と励ましを交互に行われている。(これはほとんどの預言者に当てはまり、ある意味、すべての奉仕活動の特徴付けるものである。)最初の説教は基本的に否定的なものであった。二番目の説教は励ましを目的としたものだった。[三番目]…は本質的には叱責と非難が記されている。そして…最後のものは前向きで気分を高揚させるものだ。」[\[131\]](#)

「それでは、ハガイは今日クリスチャンに何を言っているのだろうか？これらの4 つのことが彼のメッセージの基礎を構成しており、これらは主に仕えるための彼の原則である。1. 主の働きは他のすべての義務よりも優先される。…2. 主の永遠の臨在を信頼して神に従う者は、落胆せずにする…3. 主の働きは、罪から切り離された清い手段を要求する。…4. 主の働きは、信仰を持って続けられ、人々と国家に対する主権的な計画と結びついている。」[\[132\]](#)

Bibliography

Ackroyd, Peter R. *Exile and Restoration*. Old Testament Library series. London: SCM, 1968.

Alden, Robert L. "Haggai." In *Daniel–Minor Prophets*. Vol. 7 of *The Expositor's Bible Commentary*. 12 vols. Edited by Frank E. Gaebelein and Richard P. Polcyn. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1985.

Archer, Gleason L., Jr. *A Survey of Old Testament Introduction*. Chicago: Moody Press, 1964. Revised ed. 1974.

Baldwin, Joyce G. *Haggai, Zechariah, Malachi: An Introduction and Commentary*. Tyndale Old Testament Commentaries series. Leicester, Eng., and Downers Grove, Ill.: Inter-Varsity Press, 1972.

Baxter, J. Sidlow. *Explore the Book*. 1960. One vol. ed. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1980.

Boda, Mark J. *Haggai, Zechariah*. The NIV Application Commentary series. Grand Rapids: Zondervan, 2004.

Bramer, Stephen J. "Suffering in the Writing Prophets (Isaiah to Malachi)." In *Why, O God? Suffering and Disability in the Bible and the Church*, pp. 147–59. Edited by Larry J. Waters and Roy B. Zuck. Wheaton: Crossway, 2011.

Bright, John. *A History of Israel*. Philadelphia: Westminster Press, 1959.

Chisholm, Robert B., Jr. *Handbook on the Prophets*. Grand Rapids: Baker Book House, 2002.

_____. *Interpreting the Minor Prophets*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1990.

_____. "A Theology of the Minor Prophets." In *A Biblical Theology of the Old Testament*, pp. 397–433. Edited by Roy B. Zuck. Chicago: Moody Press, 1991.

Darby, John Nelson. *Synopsis of the Books of the Bible*. Revised ed. 5 vols. New York: Loizeaux Brothers Publishers, 1942.

Dyck, Rhome. "Haggai." In *Surveying the Old Testament Prophetic Books*, pp. 377–89. Learn the Word Bible Survey series. Edited by Paul D. Weaver. N.c.: Learn the Word Publishing, 2021.

Dyer, Charles H., and Eugene H. Merrill. *The Old Testament Explorer*. Nashville: Word Publishing, 2001. Reissued as *Nelson's Old Testament Survey*. Nashville: Thomas Nelson Publishers, 2001.

Edersheim, Alfred. *The Temple: Its Ministry and Services As They Were at the Time of Jesus Christ*. Reprint ed. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1972.

Eichrodt, Walther. *Theology of the Old Testament*. 5th ed. revised. 2 vols. Translated by John A. Baker. The Old Testament Library series. Philadelphia: Westminster Press, 1961 and 1967.

Feinberg, Charles Lee. "Haggai." In *The Wycliffe Bible Commentary*, pp. 889–896. Edited by Charles F. Pfeiffer and Everett F. Harrison. Chicago: Moody Press, 1962.

_____. *Habakkuk, Zephaniah, Haggai, Malachi*. The Major Messages of the Minor Prophets series. New York: American Board of Missions to the Jews, 1951.

Finegan, Jack. *Handbook of Biblical Chronology*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1964.

Freeman, Hobart E. *An Introduction to the Old Testament Prophets*. Chicago: Moody Press, 1968.

Gaebelein, Arno C. *The Annotated Bible*. 4 vols. Reprint ed. Chicago: Moody Press, and New York: Loizeaux Brothers, 1970.

Gaebelein, Frank E. *Four Minor Prophets: Obadiah, Jonah, Habakkuk, and Haggai*. Chicago: Moody Press, 1970.

Hamerton-Kelly, R. G. "The Temple and the Origins of Jewish Apocalyptic." *Vetus Testamentum* 20 (1976):1–15.

Hanna, Kenneth G. *From Moses to Malachi: Exploring the Old Testament*. 2nd ed. Edited by Roy B. Zuck. Bloomington, Ind.: CrossBooks, 2014.

Harrison, R. K. *Introduction to the Old Testament*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1969.

Henry, Matthew. *Commentary on the Whole Bible*. One volume ed. Edited by Leslie F. Church. Grand Rapids: Zondervan Publishing Co., 1961.

Ironside, Harry A. *Notes on the Minor Prophets*. New York: Loizeaux Brothers, 1947.

Jacob, Edmond. *Theology of the Old Testament*. Translated by Arthur W. Heathcote and Philip J. Allcock. New York and Evanston, Ill.: Harper & Row, 1958.

Jamieson, Robert; A. R. Fausset; and David Brown. *Commentary Practical and Explanatory on the Whole Bible*. Reprint ed. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1961.

Kaiser, Walter C. Jr. *Toward an Old Testament Theology*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1978.

Keil, Carl Friedrich. *The Twelve Minor Prophets*. 2 vols. Translated by James Martin. Biblical Commentary on the Old Testament. Reprint ed. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1949.

Koole, J. L. *Haggai*. Commentar op het Oude Testament series. Kampen, Netherlands: Kok, 1967.

Lewis, Clive Staples. *The Problem of Pain*. New York: MacMillan, 1947.

Lindsey, F. Duane. "Haggai." In *The Bible Knowledge Commentary: Old Testament*, pp. 1537–44. Edited by John F. Walvoord and Roy B. Zuck. Wheaton: Scripture Press Publications, Victor Books, 1985.

Longman, Tremper, III and Raymond B. Dillard. *An Introduction to the Old Testament*. 2nd ed. Grand Rapids: Zondervan, 2006.

McGee, J. Vernon. *Thru the Bible with J. Vernon McGee*. 5 vols. Pasadena, Calif.: Thru The Bible Radio; and Nashville: Thomas Nelson, Inc., 1983.

Merrill, Eugene H. *An Exegetical Commentary: Haggai, Zechariah, Malachi*. Chicago: Moody Press, 1994.

Meyers, Carol L., and Eric M. Meyers. *Haggai, Zechariah 1–8*. The Anchor Bible series. Garden City, N.Y.: Doubleday and Company, Inc., 1987.

Morgan, G. Campbell. *An Exposition of the Whole Bible*. Westwood, N.J.: Fleming H. Revell Company, 1959.

____. *Living Messages of the Books of the Bible*. 2 vols. New York: Fleming H. Revell Co., 1912.

____. *The Unfolding Message of the Bible*. Westwood, N.J.: Fleming H. Revell Co., 1961.

____. *The Westminster Pulpit: The Preaching of G. Campbell Morgan*. 10 vols. London: Pickering & Inglis Ltd., n.d.

Motyer, J. Alec. "Haggai." In *The Minor Prophets: An Exegetical and Expository Commentary*, 3:963–1002. 3 vols. Edited by Thomas Edward McComiskey. Grand Rapids: Baker Books, 1992, 1993, and 1998.

The Nelson Study Bible. Edited by Earl D. Radmacher. Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1997.

The New American Standard Bible. La Habra, Cal.: The Lockman Foundation, 2020.

The New Scofield Reference Bible. Edited by Frank E. Gaebelin, et al. New York: Oxford University Press, 1967.

Parker, Richard A., and Waldo H. Dubberstein. *Babylonian Chronology 626 B.C.–A.D. 75*. Providence, R.I.: Brown University, 1956.

Payne, J. Barton. *The Theology of the Older Testament*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1962.

Pusey, E. B. *The Minor Prophets*. Barnes on the Old Testament series. 2 vols. Reprint ed. Grand Rapids: Baker Book House, 1973.

Robinson, George L. *The Twelve Minor Prophets*. N.c.: Harper & Brothers, 1926; reprint ed., Grand Rapids: Baker Book House, 1974.

Smith, George Adam. *The Book of the Twelve Prophets Commonly Called the Minor*. 2 vols. Vol. 1: 10th ed. Vol. 2: 7th ed. The Expositor's Bible. Edited by W. Robertson Nicoll. London: Hodder and Stoughton, 1903.

Smith, Ralph L. *Micah–Malachi*. Word Biblical Commentary series. Waco, Tex.: Word Books, Publisher, 1984.

Stern, Ephraim. *Archaeology of the Land of the Bible. Vol. II: The Assyrian, Babylonian, and Persian Periods, 732–332 BCE*. Anchor Bible Reference Library series. New York: Doubleday, 2001.

_____. *Material Culture of the Land of the Bible in the Persian Period 538–332 B.C.* Warminster, Eng.: Aris & Phillipps; Jerusalem: Israel Exploration Society, 1982.

Swindoll, Charles R. *The Swindoll Study Bible*. Carol Stream, Ill.: Tyndale House Publishers, 2017.

Taylor, Richard A., and E. Ray Clendenen. *Haggai, Malachi*. New American Commentary series. Nashville: Broadman & Holman Publishers, 2004.

Verhoef, Pieter A. *The Books of Haggai and Malachi*. New International Commentary on the Old Testament series. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1987.

von Rad, Gerhard. *Old Testament Theology*. 2 vols. Translated by D. M. G. Stalker. New York and Evanston, Ill.: Harper & Row, 1962 and 1965.

Waltke, Bruce K. *An Old Testament Theology*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 2007.

Westermann, Claus. *Prophetic Oracles of Salvation in the Old Testament*. Louisville: Westminster/John Knox Press, 1991.

Wiersbe, Warren W. "Haggai." In *The Bible Exposition Commentary/Prophets*, pp. 437–46. Colorado Springs, Colo.: Cook Communications Ministries; and Eastbourne, England: Kingsway Communications Ltd., 2002.

Wiseman, D. J. *Chronicles of Chaldaean Kings (625–556 B.C.) in the British Museum*. London: Trustees of the British Museum, 1961.

Wolf, Herbert. "The Desire of All Nations in Haggai 2:7: Messianic or Not?" *Journal of the Evangelical Theological Society* 19 (1976):97–102.

_____. *Haggai and Malachi*. Everyman's Bible Commentary series. Chicago: Moody Press, 1976.

Wood, Leon J. *The Prophets of Israel*. Grand Rapids: Baker Book House, 1979.

Young, Edward J. *An Introduction to the Old Testament*. Revised ed. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1960.

-
- [1]See R. K. Harrison, *Introduction to the Old Testament*, pp. 944–48; E. J. Young, *Introduction to the Old Testament*, pp. 267–69; G. L. Archer Jr., *A Survey of Old Testament Introduction*, pp. 407–8; H. E. Freeman, *An Introduction to the Old Testament Prophets*, pp. 326–32.
- [2]Pieter A. Verhoef, *The Books of Haggai and Malachi*, p. 13. His reference is to J. L. Koole, *Haggai*, p. 9.
- [3]Quotations from the English Bible in these notes are from the *New American Standard Bible* (NASB), 2020 edition, unless otherwise indicated.
- [4]E.g., Joyce G. Baldwin, *Haggai, Zechariah, Malachi: An Introduction and Commentary*, p. 28; Verhoef, p. 4; Richard A. Taylor and E. Ray Clendenen, *Haggai, Malachi*, p. 44. Taylor wrote the commentary on Haggai.
- [5]E. B. Pusey, *The Minor Prophets*, 2:293.
- [6]C. F. Keil, "Haggai," in *The Twelve Minor Prophets*, 2:176; Pusey, 2:300; Arno C. Gaebelien, *The Annotated Bible*, 2:3:252.
- [7]Mark J. Boda, *Haggai, Zechariah*, p. 36.
- [8]For details concerning changes in the Persian government, see Robert L. Alden, "Haggai," in *Daniel—Minor Prophets*, vol. 7 of *The Expositor's Bible Commentary*, pp. 569–71; or Eugene H. Merrill, *An Exegetical Commentary: Haggai, Zechariah, Malachi*, pp. 5–9.
- [9]Adapted from Carol L. Meyers and Eric M. Meyers, *Haggai, Zechariah 1–8*, p. xxxi.
- [10]Leon J. Wood, *The Prophets of Israel*, p. 365.
- [11]Jack Finegan, *Handbook of Biblical Chronology*, pp. 212–13; R. A. Parker and W. H. Dubberstein, *Babylonian Chronology 626 B.C.–A.D. 45*, p. 30.
- [12]For an example, see D. J. Wiseman, *Chronicles of Chaldaean Kings (625–556 B.C.) in the British Museum*. Annals are historical records written year by year.
- [13]Verhoef, p. 5. The Julian calendar, consisting of 365 days a year, was introduced in 46 B.C. by Julius Caesar, and it is the basis of our modern Gregorian calendar.
- [14]Taylor, p. 56.
- [15]Charles H. Dyer, in *The Old Testament Explorer*, p. 815.
- [16]George L. Robinson, *The Twelve Minor Prophets*, p. 138.
- [17]*Ibid.*, pp. 142–43.
- [18]Walter C. Kaiser Jr., *Toward an Old Testament Theology*, p. 250.
- [19]J. Alec Motyer, "Haggai," in *The Minor Prophets*, P. 963.
- [20]See Taylor, pp. 73–83, for discussion of these themes; and Verhoef, pp. 32–39.
- [21]Boda. P. 46.
- [22]*Ibid.*, p. 47.
- [23]Verhoef, p. 17.
- [24]Ralph L. Smith, *Micah—Malachi*, p. 149.
- [25]Kenneth G. Hanna, *From Moses to Malachi*, p. 524.
- [26]Frank E. Gaebelien, *Four Minor Prophets*, p. 199.
- [27]Alden, p. 573.
- [28]Tremper Longman III and Raymond B. Dillard, *An Introduction to the Old Testament*, p. 480. Cf. Verhoef, p. 9.
- [29]J. Vernon McGee, *Thru the Bible with J. Vernon McGee*, 3:881.
- [30]See Longman and Dillard, pp. 14–17, for further discussion.
- [31]*Ibid.*, p. 20.

[32]Adapted from Motyer, p. 968. A chiasmus is a rhetorical or literary figure in which words, grammatical constructions, or concepts are repeated in reverse order in order to give the whole a sense of unity and, often, to emphasize the central element or elements.

[33]"The times of the Gentiles" (Luke 21:24) refers to the period of history in which the Jews are under Gentile authority, namely, from Nebuchadnezzar's destruction of Jerusalem in 586 B.C. until Jesus Christ returns to the earth and restores Israel's sovereignty.

[34]A. Gaebelein, 2:3:254.

[35]Adapted from G. Campbell Morgan, *Living Messages of the Books of the Bible*, 1:2:303–15.

[36]Robert Jamieson, A. R. Fausset, and David Brown, *Commentary Practical and Explanatory on the Whole Bible*, p. 840.

[37]Keil, 2:175–76.

[38]Pusey, 2:300.

[39]See Meyers and Meyers, pp. 10–11, for further discussion.

[40]Keil, 2:177. See Meyers and Meyers, p. 14, for a chart of the governors, royal Davidic descendants, and high priests during the Persian Period (538–433 B.C.).

[41]Parker and Dubberstein, p. 30, established the equivalent modern dates.

[42]Verhoef, p. 45.

[43]Taylor, p. 52.

[44]Verhoef, pp. 52–53.

[45]Pusey, 2:299.

[46]See R. G. Hamerton-Kelly, "The Temple and the Origins of Jewish Apocalyptic," *Vetus Testamentum* 20 (1976):12.

[47]Verhoef, p. 55.

[48]Motyer, p. 974.

[49]Bruce K. Waltke, *An Old Testament Theology*, p. 846.

[50]Warren W. Wiersbe, "Haggai," in *The Bible Exposition Commentary/Prophets*, p. 441.

[51]McGee, 3:884.

[52]F. Gaebelein, p. 209.

[53]Motyer, p. 977.

[54]Keil, 2:178.

[55]Meyers and Meyers, p. 23.

[56]Alden, p. 581.

[57]G. Campbell Morgan, *The Westminster Pulpit*, 8:315.

[58]See H. A. Ironside, *Notes on the Minor Prophets*, pp. 329–31, for helpful applications to today.

[59]Matthew Henry, *Commentary on the Whole Bible*, p. 1171.

[60]See Ephraim Stern, *Material Culture of the Land of the Bible in the Persian Period 538–332 B.C.*, pp. 215, 236; and idem, *Archaeology of the Land of the Bible. Vol. II: The Assyrian, Babylonian, and Persian Periods, 732–332 BCE*, pp. 558–59.

[61]Smith, p. 153.

[62]Wiersbe, p. 445.

[63]F. Gaebelein, p. 212.

[64]Motyer, p. 977.

[65]Baldwin, p. 41.

[66]Verhoef, pp. 65–66.

[67]Meyers and Meyers, p. 27.

[68]F. Gaebelein, p. 214.

- [69]Baldwin, p. 41.
- [70]McGee, 3:888.
- [71]F. Gaebelien, p. 216.
- [72]McGee, 3:888.
- [73]E.g., Hanna, p. 524.
- [74]Baldwin, pp. 44–45, wrote an extended note on the name “the Lord of Hosts.”
- [75]Verhoef, p. 77.
- [76]Dyer, p. 816.
- [77]F. Duane Lindsey, “Haggai,” in *The Bible Knowledge Commentary: Old Testament*, p. 1540.
- [78]See Taylor, p. 139.
- [79]Pusey, 2:305.
- [80]Taylor, p. 137.
- [81]C. S. Lewis, *The Problem of Pain*, p. 81.
- [82] *The Nelson Study Bible*, p. 1533.
- [83]Verhoef, p. 88.
- [84]Robert B. Chisholm Jr., *Handbook on the Prophets*, p. 452.
- [85]Keil, 2:184.
- [86]Pusey, 2:307.
- [87]Henry, p. 1172.
- [88]Alfred Edersheim, *The Temple*, p. 61.
- [89]See Meyers and Meyers, p. 72.
- [90]Charles Lee Feinberg, *Habakkuk, Zephaniah, Haggai, and Malachi*, p. 90.
- [91]Edersheim, f. 2. The Talmud is the body of Jewish civil and ceremonial law and legend that was compiled over many centuries.
- [92]Motyer, p. 987.
- [93]McGee, 3:893.
- [94]Alden, p. 585. Paragraph division omitted.
- [95]Cf. Keil, 2:191–92.
- [96]Robinson, p. 141.
- [97]Taylor, p. 159.
- [98]Keil, 2:192–94; McGee, 3:896; Verhoef, p. 104; Robert B. Chisholm Jr., *Interpreting the Minor Prophets*, p. 223; idem. “A Theology of the Minor Prophets,” in *A Biblical Theology of the Old Testament*, p. 421; idem, *Handbook on ...*, pp. 452–53; Taylor, p. 161–65; Boda, pp. 124–25.
- [99]McGee, 3:896.
- [100]Feinberg, p. 88. Cf. Gaebelien, 2:3:257.
- [101]Herbert Wolf, *Haggai and Malachi*, pp. 34–37.
- [102]Charles Lee Feinberg, “Haggai,” in *The Wycliffe Bible Commentary*, p. 893. See also George Adam Smith, *The Book of the Twelve Prophets Commonly Called the Minor*, 2:243.
- [103]Ironsides, p. 336.
- [104]Keil, 2:194.
- [105]Merrill, p. 41.
- [106]Keil, 2:195.
- [107]Chisholm, *Interpreting the ...*, p. 224.
- [108]Idem, “A Theology ...,” p. 421.
- [109]See Merrill, pp. 45–46, 49.
- [110]McGee, 3:898.

- [111]Ibid., 3:899.
- [112]*The New Scofield Reference Bible*, p. 962.
- [113]F. Gaebelin, p. 234.
- [114]Meyers and Meyers, p. 76.
- [115]Taylor, p. 185.
- [116]J. Sidlow Baxter, *Explore the Book*, 4:228–29.
- [117]Motyer, p. 1000.
- [118]See Claus Westermann, *Prophetic Oracles of Salvation in the Old Testament*.
- [119]Verhoef, p. 147.
- [120]Meyers and Meyers, p. 69.
- [121]See Keil, 2:213–15; Boda, pp. 164–65.
- [122]Verhoef, p. 147.
- [123]Pusey, 2:320. Cf. Chisholm, *Handbook on ...*, p. 455; Kaiser, p. 252.
- [124]See Herbert Wolf, "The Desire of All Nations in Haggai 2:7: Messianic or Not?" *Journal of the Evangelical Theological Society* 19 (1976):101–2.
- [125]Motyer, p. 1002.
- [126]Chisholm, "A Theology ...," p. 422.
- [127]Ibid.
- [128]Idem, *Handbook on ...*, p. 455.
- [129]Taylor, pp. 198–99.
- [130]Ibid., p. 201.
- [131]Alden, p. 588.
- [132]F. Gaebelin, p. 244. Paragraph divisions and italics omitted.